

歴史的法則と経済政策

大 野 秀 夫

目 次

- § 1 はじめに
- § 2 自然法則と自然史法則及び歴史的法則について
- § 3 歴史的な一般法則と人間の主体性
 - (1) 生産活動と社会関係及び意識の発生について
 - (2) 生産様式の変化と人間の主体性
 - (3) 生産様式と利害関係の意識
- § 4 経済政策の可能性

§1 はじめに

経済政策に限らず、「一般的にいつて〈経策〉とは、特定目的をもった行動を支配する諸原理」⁽¹⁾であるとすれば、これを特に経済政策についてみれば、「現実経済を一定の方向に導き、形成していくことを目ざして(目的)、政府または政党によって、現実経済にたいして働きかけられた、または働きかけらるべき、一連の行動を意味する」⁽²⁾ということになるであろう。

しかし、経済政策をこのようなものとして理解するとき、特殊歴史的な経済的社会構成体としての資本主義社会において、科学的な意味で経済政策が可能であるか、否かということは、必ずしも自明のことではない。

本論においては、歴史的な法則の性格を再検討することによって、その点を明らかにし、資本主義経済において経済政策が可能である論理的根拠を、もっとも抽象的な次元で明らかにすることを目的にする。

資本主義に固有の経済的諸原理を永続的な人間生存の様式としてでなく、特殊歴史的な一過程における原理として把える立場に立つとき、経済政策学は二

種類のもの考えることができる。

第1は、過去において行われた諸政策あるいは、現実に行われている政策を、科学的な立場から批判し、その必然性や意義及び内容を明らかにする資本家的経済政策批判としての否定的政策学である。

第2は、批判的政策学を踏まえたくて、その発展として、資本主義経済の諸矛盾を克服するため、体制変革へ連らなる経済政策を構築しようとする積極的政策学である。

ところで、資本主義を人類史における特殊歴史的な一過程として、生成・発展・衰退において把握とする立場においても、経済政策学は第1の政策学に限られるとする見解と、第2の政策学であるべきだとする見解に分かれている。

前者の立場では、科学的な政策学はネガティブなものに限られるのであって、何か実用的な政策論が存在するというような考え方を、通俗論としてしりぞけられる。

後者は多くの論者の一般的立場であると思われるが、しかし、いずれの立場に対しても、その根底にある歴史的法則の理解との関連で疑問を禁じえない。したがって本論では、経済政策の可能性の根拠は、抽象的には歴史的な一般法則の論理に内在するという基本的な立場から、従来の諸論に対する批判的な試論を明らかにしたい。

§2 自然法則と自然史法則及び歴史的な法則について

人間も自然の一部であるかぎり、自然界における諸法則に従って生存しているが、同時に人間は人間独自の歴史を創る。それは、人間が人間自身の道を歩むということであり、人間が自然の諸法則を利用し、支配するということである。

しかし、人間が一方において自然の諸法則に従いながら、同時に自然を支配するということは一見矛盾にみえる。しかし、よく検討してみると決して矛盾ではない。人間が自然の法則に従うというときの法則と、自然を支配するというときの法則は、同一法則をさすものではないと理解される。

客観的存在としての自然を個別的にみれば、そこには普遍的な諸法則が作用している。その法則自体は「自然質料固有の法則」⁽⁴⁾であり、一定の条件の下に、一定の原因があれば、必ずその条件と原因に対応する特定の結果としての自然質料の変化を生ずる。これが自然法則である。

現実の自然はこれらの個別的な自然質料の無数の集合であり、それらが無数の因果諸系列を形成する。これらの諸系列のあるものはその必然的な運動により相互に結合し、新しい因果系列を展開し、また他のものは、偶然的な結合によって、そこに新しい因果系列を形成し、必然的關係へ転化してゆく。

こうして、無数の必然的関連と偶然的結合によって織りなされる自然質料の運動過程こそ自然史である。それゆえ、自然史は自然質料の普遍的法則のみによって規定されるのではなく、その過程に絶えず偶然的諸関係を織り込むことによって、新たな必然的諸関係を形成する。しかし、自然法則の貫徹が偶然的諸関係をも含むということは、その貫徹形態がきわめて複雑な形態をとることを意味しており、それゆえ、自然史の発展過程は盲目的であり、不可逆的である。すなわち、「必然性と偶然性はお互に孤立して存在しない。ある一つの過程において、必然性は発展の主要な方向としてあらわれる。しかし、この傾向は多くの偶然的現象によってその道を壊わされてしまう。」⁽⁴⁾のである。

現実の自然は、このような無限の運動の過程としては、決して繰り返す永遠の法則としてではなく、歴史的に多様化し、異質化する弁証法的運動として、盲目的に自己発展する。この自己発展の過程が自然史であり、それに内在する法則が自然史の法則である。そして人間が従うのは自然法則であり、支配するのはその貫徹形態としての自然史の法則である。

さて、人間及び人間社会は自然史の盲目的発展過程から生み出されたものである。にもかかわらず、人類史が人間社会の歴史として自然史と本質的に異なるのは、自然史過程の被造物でありながら、人類の進化発展が自然の本質としての物質の自己発展の法則とは異質の人間の意識を生み出し、その意識が自己を産出した自然史の構成要素としての自然質料の普遍的法則を認識し、それに従うことによって、自然史過程を支配し、利用することによって、独自の発展法

則としての歴史的法則を展開するようになったからである。

しかし、このことは、決して意識が物質的基礎と絶縁することを意味するものではない。第1に、意識の存在はそれを担う人間の物質的生物学的存在に依存し、第2に、意識の主体としての発展は、自然の客体としての存在との相互関係によって可能となるからである。

意識は自己を主体として自覚しはじめたとき、自然を客体として自己に対置したが、この時に、生物学的存在としての人間の物質代謝における本能的行動は労働に転化した。そして労働が意識と自然質料とを媒介することによって、意識の自然質料に対する認識が深まり、意識が発展するとともに、それは労働を媒介にして、逆に自然質料世界の運動を盲目的発展から、目的合理的発展へ変えることになったのである。

したがって、意識的存在としての人間が構成する「社会とは、一般に物質の過程として規定さるべき自然史の、その一定発展段階における物質的、すなわち自然的総合による結節でなければならぬ。そして、特定の物質的諸条件の自然的総合としての社会は、一つの全体性 *Totalität* をしめすところの有機的統一でなければならぬ。」⁽⁶⁾ということになる。

それゆえ、われわれは自然と人間を含めての世界における諸法則の構造を、次元の異なる四種類の法則の重層的構造とみなさざるをえないのである。

第1は、自然質料に固有の普遍的法則であり、第2は、無限に存在する自然質料の多種多様な必然性と偶然性によって織り成される現実の自然の盲目性、すなわち自然史の発展性である。第3は、人類史の法則、すなわち歴史的般法則である。意識的存在としての人間は、自然史過程から相対的に独立することによって、自然法則を認識し、それに従うことによって、自然史の過程を利用し、支配することができるようになった。こうして、自然史を人間の歴史へと変えてしまった。エンゲルスが「永遠の自然法則（自然史の法則……筆者）もますます歴史的法則へ転化しつつある。」⁽⁶⁾と述べているのは、このようなことを指しているのである。

第4は、人類史の過程における発展段階に対応する歴史的特別法則である。

それは、人類史の一般的法則に立脚しながらも、生産様式の一定の発展段階に特有の法則である。

かくして、すでに第3の法則において、人間は自然史の物質的過程の被造物でありながら、その意識は労働を媒介にして自然を支配し、自然史を人間の歴史に変えたということである。そして、まさにそのことの中に、人間の歴史は人間によって主体的に変えられうるという、もっとも抽象的な論理的根拠が存在する。

§3 歴史的な一般法則と人間の主体性

(1) 生産活動と社会関係及び意識の発生

人間は自然史の過程で生み出された自然の子であり、肉体的存在たるヒトとしては、自然そのものでありながらも、自然史における物質代謝過程で進化発達し、意識の素地を形成された。そして同時にこの過程は、自然に対するヒトの単なる反動的行動が、意識的、目的的行動としての労働へ転化する過程であり、それゆえに、ヒトの人間への第一歩でもあった。

意識はその発生期においては、まだ感覚器官の反応であり、物質代謝活動も内的及び外的諸条件の自然史的变化に反応する程度のものであった。そのため「生産の発展が人類自体の系統発生的発展とまだ並行してすすんでいることを特徴とする」⁽⁷⁾程度であった。すなわち、人間の意識が自然史的過程からまだ独自性を獲得するほど発達していないため、人間に固有の生産がまだ行われていなかった。

しかし、人類の系統発生という自然史的進化の過程によって産出され、外界の物質的運動を受動的に反映するにすぎない反応であるにしても、その反応の中に人間としての主体的意識の萌芽はすでに存在していた。

この意識の萌芽はしだいに発展し、自然史諸過程の物質的運動に反応するのみでなく、事前的に作用しうろようになった。この事前的作用によって、人間と自然の物質代謝は、人間の側からの主体的な自然への働きかけ、すなわち主体の対象化としての労働へ転化した。

こうして人間は、自然史過程としての物質代謝に反応する状態から、労働という主体的行為を通じて、自然を利用し、支配する方向へ一歩を踏み出すことになった。このことについてエンゲルスは、「動物は外的自然を利用するだけであり、もっぱらその存在によってのみ外的自然に変化をもたらすのであるが、人間はみずから変化をもたらすことによって自然を自分の目的に奉仕させ、自然を支配するのである。そして、これが人間をその他の動物から区別する最後の本質的な差異であって、この差異を生みだすものは、またしても労働なのである。」⁽⁶⁾と述べている。

ここでエンゲルスは、人間と他の動物を区別するもっとも本質的な差異は、人間が自然を利用し、支配することであることを明らかにし、それをつくりだしたものは、自然史諸過程に対する目的意識的活動としての労働であることを明らかにしている。

さて、単なるヒトから意識的主体としての人間への過程は長く、その間、さまざまな発達段階を経過したと思われる。したがって、なお「原始の人間にあっては、自然にたいする人間の関係はまだきわめて局限されており（そのことが社会関係の狭さの条件をなす）対象（客体）は主観的な欲求の観点からしか意識されない。」⁽⁶⁾したがって、かかる段階においては人間はなおヒトとして、その存在の大部分が自然史的過程に支配されており、自己を対象化する主体たりえていない。それゆえ、人間以外の自然は「人間から独立なむきだしの自然という性格（自然的対象性）を失って」⁽⁶⁾いない。しかし、人間の目的意識的活動としての労働が、自然史の長い過程の中から発生してくると、人間は「労働によって自己を対象において対象化」しうようになる。この「対象化の過程は、同時にまた……対象の自然的諸性質が人間の生きた活動の諸能力、生きた労働の諸性質に転化する過程、すなわち自然の『非対象化』（*Entgegenständlichung*）の過程である。もちろん、『非対象化』とは、対象が存在しなくなるということではない。対象は『非対象化』において、人間から独立なむきだしの自然という性格（自然的対象性）を失って、人間的な対象となり、人間的対象として存在するのである。こうして、労働（対象的活

動)は人間の対象化と自然的対象の非対象化の統一にほかならない。」⁽⁴⁾しかし、またかかる意味の労働は、人間の社会的関係においてしか労働たりえない。

それゆえ、ヒトの物質的代謝における本能的行動の意識的行動としての労働への転化、発展は、意識の形成過程であると同時に、社会的人間関係の形成過程でもあった。そして、かかる社会的人間関係の下において、自然に対して働きかけるとき、狭隘な自然的物質代謝の限界を突破しえたのである。また、かかる社会的な人間関係によって、原始的な人間の意識の素地が、具体的内容を与えられ、高度な自立性と主体性をもつようになったのである。

このことについてマルクスは「生産のさい、人間は、自然に対して関係するだけではない。彼らは、一定の仕方で共同して活動し、その活動を相互に交換しなければ、生産できない。生産するために、彼らはたがいに一定の関係やつながりを結ぶが、こうした社会的な関係やつながりの内部ではじめて、彼らと自然の関係がおこなわれ、生産がおこなわれるのである。」⁽⁵⁾と述べている。

人間の物質代謝における対象物獲得の行動が労働へ転化する過程は、同時に本能的行動が意識的行動へ転化する過程であって、この過程において人間は自然史における進化をその基盤として、道具を使用するようになった。しかし、高度に進化した類人猿においても、孤立したり、あるいは、たとえそれが集団を形成していても、生産活動に適合しない集団である場合には、道具は発生しなかった。すなわち、「安定した基本的な形の道具の出現は動物集団においては不可能であった。それはある程度生産活動の必要性に適應した集団、すなわち、原始の人間集団においてのみ出現した。」⁽⁶⁾ここにわれわれは、人間の生産活動、社会的関係及びそれらの主体的発展動因としての人間意識の同時的発生及び弁証法的関係をみることができる。

(2) 生産様式の変化と人間の主体性

「物質的富の生産は社会発展におけるもっとも主要な、決定的要因である。生産の様式は生産の二つの局面である生産力と生産関係の総体である。」⁽⁷⁾、そして、この両者の相互関係は、「一般に内容が形式を規定するように、生産力も生産関係を規定する。逆に、生産関係もまた、生産力の機能に一定の社会

的な質を与える。生産関係そのものは、生産力の状態と性格に依存するが、ほかならぬ生産関係が、それぞれの生産様式の社会的本性を規定する」⁽⁹⁾といわれる。このような規定は、マルクスが『経済学批判』の序言で明らかにした、いわゆる史的唯物論の定式のもっとも一般的な理解であろう。

ところで、人間がまだ自然史の一部として、系統発生の段階にあった時、人間生活の歴史は、すでに述べたように、自然の自己発展の一部にしかすぎず、その発展の動因は自然における因果的諸法則と偶然性であった。しかし、人間がひとたびこの自然史の過程における系統発生的段階から相対的に自立するにいたるや、人間の歴史は単なる自然史の一部ではなく、まさに人間の歴史として、自然史の過程をその基礎に含みつつも、人間に固有の法則としての歴史的法則を展開することになる。史的唯物論とは、かかるものとしての人間が創造する歴史過程の一般的法則に他ならない。それは自然史に対する独自性という点において、意識的存在としての人間の歴史における一般的法則である。そういう意味で史的唯物論の諸命題は人類史の一般的法則であり、それゆえ人類史の特殊歴史的段階における、さまざまな経済的社会構成体 (socio-economic formation) の運動・発展はこの一般的法則を基礎にしつつ、その段階に特有の特殊歴史的法則を展開するものとなる。

では、自然史と本質的に異なるものとしての人類史における一般的变化・発展の法則に内在する動因は何であろうか。これについてマルクスは「社会の物質的生産諸力は、その発展がある段階に達すると、いままでそれがその中で動いてきた既存の生産諸関係、あるいはその法的表現にすぎない所有関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展形態からその桎梏へと一変する。このとき社会革命の時期がはじまるのである。」⁽¹⁰⁾として、生産力と生産関係の矛盾を生産様式の変化・発展の動因としている。しかし、ここで注意したいのは、生産力や生産関係それ自体は運動そのものの実体的動因ではなく、その物質的形態であるということである。

すでに述べたように、この運動の実体的動因は自然史の過程から発生した人間の意識である。なぜなら、人類史を自然史から分かち決定的要因は自然史の

過程における物質的運動を事前的に計画し、意図的に操作しうる人間意識の存在である。

そういう意味では、マルクスが生産力と生産関係の弁証法的関係に歴史的発展の一般法則を求めるにあたって、意識的存在としての人間の主体性を必ずしも明確にしているとはいいきれない。この点で、後に多くの客観主義的解釈を許すようになった原因があるとみられる。

歴史的法則と人間の主体性の関係を考える場合、マルクスの考えていた主体性と歴史的法則のかかわり合いには、微妙に異なる二種類のかかわり合いをみることができる。

第一は、『経済学批判』の序言にみられるもので、「人間は、その生活の社会的生産において、一定の必然的な、かれらの意志から独立した諸関係を、つまりかれらの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係をとりむすぶ。この生産諸関係の総体は社会の経済的機構を形づくっており、これが現実の土台となって、そのうえに、法律的、政治的上部構造がそびえたち、また一定の社会的意識諸形態はこの現実の土台に対応している。物質的生活の生産様式は、社会的・政治的・精神的生活諸過程一般を制約する。人間の意識がその存在を規定するのではなくて、逆に、人間の社会的存在がその意識を規定するのである。」⁶⁹⁾と述べているが、ここでは、経済的社会構成体を、土台と上部構造にわけ、土台は生産諸関係の総体＝社会の経済的機構＝物質的生産様式であり、その上に、法律・政治的上部構造及び一定の社会的意識諸形態等が対応するという。そして、この土台は人間の意識から独立した諸関係であり、その変動は「自然科学的な正確さで確認できる変革」⁷⁰⁾をするものとされる。

ここにおいては、土台＝生産様式は人間の意識に関係なく、意識は土台に対応する上部構造であり、土台へ反作用するという形で機能するものとされる。このような意味での人間意識の位置づけは、エンゲルスにもみられる。エンゲルスが晩年に、コンラート・シュミットやヨーゼフ・ブロッホにあてた書簡においては、同様の趣旨が次のようにとりあげられている。

シュミットへの手紙で「物質的存在様式が第一次的動因であるとしても、そ

のことは、観念的な諸領域が物質的存在様式にたいして、反作用を、ただし二次的な作用をおよぼすのを排除するものでない……」⁽⁹⁾と述べ、またブロッホへの手紙で「唯物論的歴史観によれば歴史において最終的に規定的な要因は現実生活の生産と再生産である。それ以上のことをマルクスも私も今までに主張したことはありません。さて、もしだれかがこれを歪曲して、経済的要因が唯一の規定的なものであるとするならば、さきの命題を中味のない、抽象的な、ばかげた空文句にかえることになります。」⁽¹⁰⁾と述べている。

これは、歴史の客観主義的解釈の風潮を戒しめて、人間意識の歴史における主体的役割を述べたものであるが、しかし、基本的にはさきの『経済学批判』の序言における立場と全く同じ立場に立つものであって、それを、上部構造としての意識に重点をおいて説明したものと思われる。

こうして、経済的社会構成体の変化・発展は、物質的基礎としての土台における生産力と生産関係の矛盾を動因とし、まず土台が変化し、それに照応して上部構造たるイデオロギー諸形態が変化し、全体として経済的社会構成体そのものが変化発展するものとされる。その場合、エンゲルスが指摘するように、上部構造から土台への反作用は二次的ではあるが、きわめて重要な働きをするといわれる。

しかし、この考え方によれば、経済的社会構成体の発展法則における人間の主体的意識の位置づけは、もっぱら上部構造であって、生産力や生産関係それ自体には本質的なかわりはないものとされている。

ところで、他方マルクスは歴史的法則と人間の主体的意識のかかわりについて、以上の規定とは微妙に異なる規定もしている。

すなわち、「人間は、自分で自分の歴史をつくる。しかし、自由自在に、自分で勝手に選んだ状況のもとで歴史をつくるのではなく、直接にありあわせる、あたえられた、過去からうけついだ状況のもとでつくるのである。あらゆる死んだ世代の伝統が、生きている人間の頭のうえに夢魘のようにのしかかっている。」⁽¹¹⁾と述べているが、これは歴史と人間の主体性とのかわり合いを一般的な形で述べたものである。「自分で自分の歴史をつくる」というときの

自分は一定の生産関係の下における階級的存在としての人間をさすが、とすればマルクスはここで、階級性を体現するものとしての人間が主体的な歴史の形成者であることを言わんとしている。

では、それぞれの時代の階級の主体としての人間が歴史をつくるということとは、経済的社会構成体といかにかかわり合っているのであろうか。すなわち、階級的存在としての人間の主体性は生産様式の物質的發展法則に内在化しているのか、それとも上部構造としてのイデオロギー形態として、世代から世代へ引きつがれ、歴史的に蓄積されつつも、結局は物質的法則を単に反映するにすぎないものなのか、ということである。

これを、さきの文脈に照らしてみると、「あらゆる死んだ世代の伝統が生きている人間の頭のうえに夢魘のようにのしかかっている」という場合、死んだ世代の伝統＝主体的活動の諸結果が経済的社会構成体の物質的基礎としての生産様式の中に内在しているのか、それとも、イデオロギー形態の中にのみ受けつがれているのか、この文脈からは必ずしも明らかでない。

もし『経済学批判』の先の引用部分のように「人間は、その生活の社会的生産において、一定の必然的な、かれの意志から独立した諸関係」をとり結ぶものとすれば、人間の主体性は経済的社会構成体の物質的基礎とは直接に関係ないということになり、もっぱら、イデオロギー形態として受けつがれ、その時代の生産様式の發展法則を反映しつつ、それに反作用を及ぼしうるにすぎない

しかし、その場合われわれは経済的社会構成体の發展を、究極的には生産様式の自己運動としてしかとらえることはできない。それはたしかに「自然科学的の正確さで予測しうるもの」ではあるであろう。

ところで、マルクスはまたつぎのようにも述べている。「自然が、一方の側に貨幣または商品の所持者を生みだし、他方の側にただ自分の労働力だけの所持者を生みだすのではない。この関係は、自然史的な関係ではないし、また、歴史上のあらゆる時代に共通な社会的な関係でもない。それは、明らかに、それ自体が、先行の歴史的發展の結果なのであり、多くの経済的變革の産物、たくさんの過去の社会的生産構成体の没落の産物なのである。

さきに考察した経済的諸範疇もまたそれらの歴史的な痕跡を帯びている。生産物の商品としての定在のうちには一定の歴史的な諸条件が包みこまれている。」⁹⁹。ここでは、資本発生の論理的機構がとりあげられているが、対象の主要な観点が二つにしばられているようである。

第1の点は、資本主義的生産様式の主要側面としての資本主義的生産関係の成立根拠を、過去の歴史的結果を条件とし、その条件の下における労働力の商品化によって明らかにしようとしていること。

第2の点は、かかる条件の発生は「自然史的な関係」ではないということ。そして、このことは「生産物の商品としての定在のうちには一定の歴史的條件が包みこまれている」からである、としていること、である。

いまここでわれわれの論点に即してみれば、第2の点における、「自然史的な関係」ということと、「生産物の商品としての定在」の歴史的な性格の関連が主要な論点となる。

すでに述べたように、自然史過程も自然の世界が全体として把握されるとき、無数の因果性と偶然性によって織り成される諸関係は、たとえそれが盲目的で、即自的な過程であるにもせよ、それは一つの発展過程であり、それゆえにまさに歴史的過程として、自然史を形成する。したがって、マルクスがここで自然史過程と異なるものとしての自然史的過程＝歴史的過程をとりあげる場合、それは、自然の自己発展における歴史性と全く次元の異なるものとしての人間の社会の歴史性を考えているものと解しなければならない。

とすれば、「生産物の商品としての定在」に包みこまれている歴史的條件は論理的にはどういう性格のものになるであろうか。この場合、歴史的條件というのは、自然史的條件とは異なるものであり、人間が創り出したものとしての歴史的條件以外ではありえない。それゆえ、いま結論を先取りしてみれば、この異質性の根源は究極的には、自然史過程とは異なるものとしての歴史的過程に固有の人間意識の存在に求める以外にないのである。

人間の意識は発生史的には長い自然史諸過程の産物でありながら、しかも、長い進化・発展の歴史を通じて、自然史諸過程から相対的に独自性を獲得する

にいたった。この意識が自然を利用し、支配する（＝労働する）形で自然史諸過程に自己を織りこむことによって、自然史そのものは人間の歴史に変わっていった。すなわち「ある対象的世界を実践的に生みだすこと、非有機的な自然に労働をくわえることは、人間が一つの意識的な類的存在としての実を示すことである。」⁶³、かくして、「人間は、過去の労働の生産物、したがって過去の人間の本質力—人間の能力と欲求—の対象化としての対象が、対象として存在するからこそ、過去の世代の到達したところから始めることができる。このことは、労働によってのみ歴史そのものが可能になることを意味する。自然に対する人間の真の歴史的な関係は労働においてこそ成立するのである。」⁶⁴したがって、自然史諸過程を基盤にしつつも、その上により高次の人間の歴史が展開される時、より新しい人間の歴史としての現代は、必ずつぎの諸条件を歴史的条件として与えられることになる。

第1に、物質の自己運動としての自然史における現代までのすべての帰結を、未来への出発における自然史的条件として与えられることになる。

第2に、現代にいたるまでの人間の意識的な生活再生産活動としての労働の結晶が、生産手段及び消費手段として、また、生活再生産における人間の社会的諸関係の現実的な構造が、歴史的な物質的条件として与えられることになる。

第3に、現代にいたるまでの識意のイデオロギー諸形態の蓄積が歴史的な文化的条件として与えられることになる。

さて、「生産物の商品としての定在」に包みこまれている歴史的条件とは、広義には、これらの3つの条件であって、すべての生産物は、その生産にあたって、何らかの形で、これらの条件を含まざるをえない。ただ、それが特殊歴史的な商品という規定においては、第1の自然史的条件は当然に捨象されるので、第2、第3の条件を人間に固有の歴史的条件として把握しなければならない。

こうみえてくると、現代における「生産物の商品としての定在」は、現代にいたる時代の、変化発展する生産様式及びイデオロギーの総決算を、その歴史的出発条件として与えられ、それらを現代の人間の主体的意識により肯定的にか否定的にか媒介しつつ、商品規定の中に包み込んでいく。

したがって、現代の資本主義における「生産物の商品としての定在」は、現代にいたるまでの時代の人間の主体的意識を、その意識の現実的表現としての労働を通して、商品生産物という物質形態の中に対象化しているということになる。これは換言すれば社会の物質的基礎としての生産物は、歴史上の各時代の人間の主体的意識の客観化・対象化された累積でもあるということである。

したがって、経済的社会構成体における「生産関係の物質性は、この関係が人々の意志や意識から独立して、客観的に存在する点に現われる。その存在と性格を規定するのは、人間の願望ではなくて、すでに到達した生産の発展水準である。」⁸⁴ という説を無条件で肯定しえない。それは、「すでに到達した生産の発展水準」自体が人間の主体的生活再生産活動によって形成されるという、人間の歴史に本質的な、重要な点がネグレクトされているからである。

以上から明らかなように、人間の主体的意識の問題は、経済的社会構成体の上部構造に特有の問題ではなく、土台としての生産様式の基本的性格そのものにかかわるということである。すなわち、生産様式は物質的形態としてしか現象しえないが、物質的形態そのものではないということである。このことは、また、土台としての生産様式の発展過程が、自然史的過程(=歴史的過程)であって、決して自然史過程でないということにも示されている。このようにみると、人間が歴史を創るということの根源的意味が明らかになる。

(3) 生産様式と利害関係の意識

人間の主体的意識は単なる個人の恣意的願望や心情ではないし、また、知的に発達し、昇華されたイデオロギーでもない。ここでいう意識とはすでに明らかにしたように、発生論的にみれば、ヒトが自然史発展の結果、到達した高度の感受性であり、さらにそれが、歴史的に発達したものとしての目的意識である。このような感受性、目的意識が人間存在の根柢にある物質的利害関係へ向って求心的に作用しつつ、歴史の流れを主体的に担う社会的意識が形成される。これがわれわれのいう人間の主体的意識である。かかる意味の意識こそが、生産力の発動要因であり、生産関係形成の実体的動因である。

このような意識との関係で、林直道教授は次のように述べている。「この物

質的利害関係（＝経済）にもとづいて、たがいに抗争する人間集団それぞれの要求が生み出される。この要求にかなう思想や動機だけが人々の大群をとらえて社会の発展に大きな力を及ぼすのであって、この要求をみたすことのできない思想や動機は影響力をもちえず、歴史の流れのなかに消えうせてしまう。このようにして社会というものは自由な意志をもった人間の行動によって組み立てられているにもかかわらず、勝手きままな方向に発展しうるものではなくて、結局においては思想や動機の背後にある物質的利害関係（＝経済）によって発展方向を決定される。こうして社会の発展は人々の意志や意識から独立した客観的法則にしたがうことになるのである。」⁸⁰。ここでは、人間によって構成される社会が、なぜ人間の意識（ただし、林教授はここで思想や動機といわれているが、これはむしろ知的に昇華されたイデオロギーであって、すでに述べたように、ここでいう意識はそれの根底にある生々しい人間的な能力である）とは独立した客観的法則性を示すかについて、主体の側からみて、法則性の成立する根拠をぎりぎりの点で物質的利害関係（＝経済）に求めておられる。しかし、人間の感受性や意識が物質的利害関係に向って、生存のため求心的に作用することによって、そこに一定の方向への人間集団の運動方向や法則性が出てくるのは、当然である。しかし、それは生命をもちそれをより良く維持しつづければならない自然存在としての人間が、意識の作用を媒介にして、自然史の盲目的発展を自己の生存に有利になるように、支配し、利用することによって、種を維持、繁栄しえた事実の事後的な結果である。

したがって、人間の諸行動の歴史的結果からみた客観的物質的法則性の存在によって、歴史の形成そのものにおける人間意識の主体的役割を否定することはできない。それは、歴史的過程における人間意識の主体的役割を否定することによって、歴史的過程を自然史的過程に解消してしまう客観主義的決定論へ通じることになる。

そこでつぎに、物質的利害関係の基本的性格とその歴史的展開の論理について若干考察してみることにする。

物質的利害関係は基本的には二重の物質的基礎と自然史的及び歴史的形成物

としての人間意識の弁証法的統一である。物質的世界に対する主体としての人間は、その生物学的存在としての側面においては物質的存在であるが、歴史的人間はこの物質的存在と意識の統一物である。これが、歴史形成の主体となり物質世界を客体として対置し、それに主体的に働きかけ、物質代謝を行うことによって、人間は種を維持し、繁栄しうるのである。そういう意味で、人間の生存自体が、自己自身の物質性と、客体の物質性の二重の物質的基礎を不可欠とする。しかし、この主体的物質性と客体的物質性を媒介し、そこに人間の歴史性を形成する主体的動因は意識である。そして、この二重の物質性と意識の統一としての人間存在の基本構造が歴史的に展開されるとき、利害関係がより具体的に展開し、形成されてくる。

物質的利害関係は歴史的には二つの側面をもって展開される。それは、生活物財の生産と消費の側面である。すでにみたように、人間は集団的にのみ生産を行いうるが、このことは、必然的に消費のための集団的分配に一定のルールを形成する。こうして、物質的利害関係は生産局面と分配局面において形成されることになる。

では、この二つの局面における利害関係に人間の意識はどのように関係して、内面化されていくのであろうか。

まず、生産局面における物質的利害関係は直接的生産者と自然との関係すなわち生産力にあらわれてくる。

「生産力とは社会が自然にはたらきかけ、それを変化させるために用いる諸力」⁸⁾であるといわれるが、すでに繰り返し指摘したごとく、自然に働きかける社会とは、能動的・主体的要因の実体として、共通の利害関係意識によって結合された人間である。かかる人間が主体的・意識的に自然に働きかけ、一定の労働力の投入に対してより効率的に産出を得ようとするのが、生産局面における利害関係である。そしてこの場合、人間の主体的意識は主に二つの形で重要な役割を演ずる。

第1に、人間の意識は他の動物の物質代謝における本能的欲求に較べ、歴史的諸段階を通るにつれて、格段に進歩していくため、その生理的限界を超えて

消費財貨の増大を求める。このような意識が基本的には直接的生産における効率性の追究となり、生産力発展の一般的推進動機となる。

これらの推進動機は、自らが重要な役割を演ずる生産様式の発展によって、逆に規定されながら、生産様式の発展段階に照応して、さまざまな形をとることになる。

消費財貨を求めての物質的利害関係がもっとも素朴な形で出てくるのは、原始共同社会である。この場合、社会の構成員はほとんどの者が直接的生産者であり、人間の結合関係による生産と消費の分離が、共同体内部ではまだ発生していない。したがって、より良い消費を求める共同体構成員の物質的利害関係意識は、生産物を量質ともに向上させようとする生産力の推進動機と直接一体となっている。

しかし、資本主義的生産様式においては、労働者の消費における利害関係意識は、資本家の利潤動機を媒介にしてしか、生産力と結合しなくなっている。生産力の発展は、本来全社会の構成員にとって共通の物質的利益になるはずであるが、資本の根柢が剰余価値の生産にあるかぎり、直接的生産者としての労働者の消費における利害関係意識が直接に生産力を推進する動機とならず、資本家の利潤動機によって、否定的に媒介されざるをえない。

第2に、人間の意識が労働過程を通じて、生産力を創造するという点である。労働を物質代謝の側面からみると、それは肉体的力能と意識的力能の統一物である。意識の中における生産力推進の一般的動機にもとずいて、意識は同時に、労働過程の中で、新しい生産力を創造する働きをする。

先に、自然史の法則について述べたように、自然史過程は無数の因果系列の連鎖と、偶然性によって織りなされている。自然史過程においては、因果系列そのものの連鎖のそれぞれの結節は厳密な自然法則に支配され、人間はこれを任意に変えることはできない。しかし、因果系列をお互に結合させ、新しい因果系列を創り出すことができる。それは、自然史過程では、発生しえないか、または、偶然的にしか発生しない諸関係を、人間が意識的に創り出すことである。無限の物質的存在における因果諸系列から、無限の新しい因果諸系列を創

造できる可能性がある。これらの新しい組み合わせの中から、人間は自己の経済的利害関係にかなうものを選び出すことができる。これは、新しい生産力および使用価値の創造である。

したがって、生産力とは主体的意識における認識能力を媒介にした、人間と自然との結合関係であり、それゆえ、自然法則に対する科学的認識が深まるにつれて、生産力は発展する。そういう意味で、社会におけるすべての富は対象化された労働であるとともに、対象化された意識でもある。

つぎに分配局面と意識のかかわり合いについてみることにする。

物質代謝活動は集団的形態において、はじめて、生産活動になりうることにについてはすでに述べたとおりである。ところで、物質的利害関係の意識が、生産力発展の主体的動因であり、生産力が発展することによって、第1に、人間の生理的必要限界を超えて剰余生産物の生産が可能になったこと。第2に、この生産力の発展が同時に技術的・社会的な分業を発展させた。

これらの剰余生産物の発生と、分業の発展は、必然的に生産局面に対応する分配局面を発展させる。ところで、分配局面においては剰余生産物の存在を基礎にして、利害関係の競争が発生し、この競争の中から生産に対応しない分配の不公平が発生してくる。

一方には、生産貢献の度合よりも少ない消費手段の分配を受ける者と、他方にはより多い分配を受ける者が発生してくる。この後者の集団が権力機構を形成し、社会的な剰余生産物を権力的に収奪するようになってくる。こうして、階級的生産関係が成立してくる。古代社会や封建社会においては、剰余生産物は基本的には消費手段の形態であるが、生産力の発展に伴う生産物の増大の結果、総生産物に占める生産手段の割合が増加するにつれて、生産手段の収奪・蓄積が進んで、資本主義的生産への展開が準備される。

こうして、消費手段の直接的収奪から、生産手段を媒介にした間接的な収奪への移行は、形態的には生産力の発展にもとづく、生産関係の発展であるが、同時に、この過程を背後から動かした主体的動因の根底には、分配局面における物質的利害関係の意識が存在する。資本はこの利害関係意識を主体的動因と

して、生産局面を包摂し、支配することによって、剰余生産物の収奪を剰余価値の生産という、自己完結的な運動体系として完成したのである。

主体的側面に関していえば、資本主義的生産においては、生産力を推進しようとする直接的生産者の一般的利害関係の意識は、資本による生産局面の全面的包摂により、資本家の利害関係意識に媒介されざるをえないことになる。

以上述べたところから明らかなように、生産力と生産関係に内在する主体的要因を捨象し、物化されている資本主義的生産様式を、そのものとして構造的・形態的に把握すれば、生産関係は生産力に照応し、生産関係は逆に生産力の発展に一定の規制をするということになる。

しかし、生産様式の発展を、構造的・形態的にのみ把握することは、法則の客観性を物質的運動に解消してしまうことであり、客観主義的決定論でしかない。「実体論の無視はまさに人間の無視・主体性の無視にまっすぐにつながるものである。人間＝主体が能動性をもちながら、しかもその作用が客体として他の客体と交互作用する主体の唯物論的＝弁証法的把握と、交互作用すなわち実践の場合に成立するその客観的な法則性の構造的な把握」⁹⁸の統一こそが、人間社会の歴史を自然史とは本質的に異なるものとして、把握することを可能にする。

ぜななら、これまで明らかにしたように「『歴史』とは、自己の—こういうとまるで歴史が別個の人格でもあるかのようだが—一目的を完成するために、人間を手段としてつかうようなものでなく、歴史とは、自己の目的を追求しつつある人間の行為にはかならない」⁹⁹からである。

ただ、歴史的過程においては、人間の主体的意識は、生産様式展開の動因としてそれを推進しつつも、歴史が現在を経過する瞬間において、それは生産様式という物化された形態としてしか存在しえず、意識がそれ自体として自己を客観的に示しうるのは、上部構造としてのイデオロギー形態においてのみとなる。

ここに、経済的社会構成体の土台における主体的意識の役割を正しく把えることの困難さがある。

§4 経済政策の可能性

以上、歴史的な一般法則の次元における人間の主体的意識の役割を明らかにした。そしてこのことは、将来に向っての生産様式の変化を人間が意識的に操作しうる可能性を、もっとも抽象的な次元で示すものである。

しかし、経済政策論としては、この抽象的可能性が資本主義的特殊法則の次元で、いかにして可能であるかを示さなければならない。ただし、本論は主体的意識と資本主義における特殊法則との関係を、直接明らかにすることは目的としていないので、最後に、代表的見解に関連して、若干の展望を述べることにする。

本論の冒頭で、経済政策学はブルジョア経済政策に対する批判的政策学でしかありえないとする見解と、批判的政策学であるとともに、積極的政策学でもあるべきだとする見解があることについて述べた。前者は宇野弘藏教授に代表される立場であり、後者は多数説の立場とみられる。しかし、この両者は、資本主義生産様式の発展における、人間意識の主体性を認めないという点では共通しているようである。

宇野教授は科学的立場からする経済政策の可能性を否定されて、次のように述べられる。「資本主義社会の経済政策のような特殊の形態のもとに特定の内容をもって行われるものに対して、そういう一般的規定をもつてのぞむということは、現実の政策の客観的根拠を批判的に明らかにすることは問題にしないで、何か理想的な政策でも可能であるかのごとき幻想をともない、その目的・手段が科学的に客観的に与えられるかのように考えられることにもなるからである。」⁽⁶⁾ また「商品経済的行動に対して経済知識を技術的に利用することを経済学の実際的作用でもあるかの如くに誤解するものにほかならない。」⁽⁶⁾とも述べている。

では、なぜ科学的であればあるほど、政策が不可能であるのか。それは、資本が労働を包摂し、一社会の総再生産過程を支配し、労働力の商品化を通して自己完結的な循環体系を完成し、自らが生み出す諸矛盾を恐慌を通して解決し

つつ、永続的に循環するものとされているからである。

そうだとすれば、このような自律的運動形態を変えるものは、上部構造からする「特殊の形態のもとに特定の内容をもって行われる」政策でしかありえない。そのような政策は、それが資本家的な立場からのものにせよ、労働者的な立場からのものにせよ、それが、科学たる政策学の対象たりえないのは、宇野教授の指摘されるとおりである。

しかし、ここで重要なことは、資本主義的生産様式の中に自らを対象化しつつ、また、絶えず将来にむかって、目的合理的に既存の生産様式を運動せしめる動因としての主体的な人間の意識が捨象されている。動因を捨象され、自律的体系とされた資本それ自身には、それ以上の展開動因はありえないし、したがって政策の余地は全くなくなっている。

つぎに、積極的経済政策の可能性を主張する見解においても、人間の主体的意識とは関係なく客観的法則が貫徹するということである。すなわち、「経済法則は、人間の意志や意識からは独立した客観的法則である。その場合、客観的という意味は、それぞれ固有の意識をもっている人間から成り立っている社会が、この意識体としての人間の存在とは無関係に存在し、発展できるという意味ではなく、社会的存在は人間の社会的意識からは独立している、という意味である。」⁸⁰ ということである。ここで、意志や意識といわれるものが、個人の単なる主観的願望や感情なのか、それとも、われわれのいう物質的利害関係にもとづく、集団的意識なのかは明らかでないが、この両者を含むものと解される。

しかし、いずれにしても、経済の運動・発展の法則が、人間の意志や意識とは独立に自己を貫徹するとすれば、歴史的法則は結局のところ、人間をも含めての広義の自然史の発展法則に解消してしまわざるをえない。そこには、人間が意識的に経済過程を操作しうる可能性は存在しないことになる。

すでに明らかにしたように、人間は自然法則を利用し、支配することによって、自らの物質的利害関係の意識を歴史的法則の中に客観化し、そうすることによって自然史を人間の歴史に変えた。そして、その歴史の中において、人間

は自己が動因となって形成した既存の生産力と生産関係を、自らに再び与えられた条件として、さらにそれを展開・発展させる動因として主体的に機能する

生産様式の発展に伴い、歴史上においてはさまざまな経済的社会構成体が、それに固有の歴史的特殊法則を展開する。しかし、それらがいずれも人間の歴史として自然史と本質的に異なるゆえんは、その特殊歴史的性格にもかかわらず、歴史を展開する動因としての、主体的な人間の存在に他ならない。

それが現実の資本主義的生産様式の下において、どの程度まで科学的に可能であるかはまた別個に検討すべき課題であるが、経済政策が本質的に可能であることの抽象的根拠はまさにここに存在するといわなければならない。

昭和50年9月30日稿了

注

- (1) ボウルディング著、海老原武邦他訳『経済政策の原理』3頁
- (2) 東京大学『経済学論集』第35巻第4号横山正彦「経済理論と経済政策との関連」18頁
- (3) アルフレート・シュミット著、元浜清海訳『マルクスの自然概念』98頁
- (4) V. Afanasyev, "Marxist Philosophy", Moscow, 1965, p. 144.
- (5) 梯明秀著『物質の哲学的概念』45頁
- (6) エンゲルス著、菅原仰訳『自然の弁証法』国民文庫版 329頁
- (7) ブロムレイ他著、中島寿雄訳『マルクス主義と人類社会の起源』14頁「エンゲルスと原始史の諸問題」
- (8) エンゲルス著『猿が人間になるについての労働の役割他』国民文庫版 20頁
- (9) 竹内良知著『マルクス主義の哲学と人間』92頁
- (10) 前掲書 78頁
- (11) 前掲書 78頁
- (12) マルクス著『賃労働と資本』大月版マル・エン全集第6巻 403頁
- (13) G. Glezerman and G. Kursanov, "Historical Materialism", Moscow, 1968, p. 50.
- (14) V. Afanasyev, "Marxist Philosophy", Moscow, 1965, p. 182.
- (15) ソ連邦科学アカデミー哲学研究所編 川上洗・大谷孝雄訳『マルクス＝レーニン主義哲学の基礎』296頁
- (16) マルクス著、武田隆夫他3氏訳『経済学批判』岩波文庫版 13頁
- (17) 前掲書 同頁

- (18) 前掲書 14頁
- (19) 「エンゲルスからコンラート・シュミット（在ベルリン）へ」大月版マル・エン全集第37巻 379頁
- (20) 「エンゲルスからヨーゼフ・ブロッホ（在ケーニヒスバルク）へ」前掲書 401～402頁
- (21) マルクス著、村田陽一訳『ルイボナパルトのブリュメール18日』国民文庫版 17頁
- (22) マルクス著、マルクス＝エンゲルス全集刊行委員会訳『資本論』第1巻第4章 222頁
- (23) マルクス著、藤野渉訳『経済学・哲学手稿』国民文庫版 106頁
- (24) 竹内良知著『マルクス主義の哲学と人間』63頁
- (25) ソ連邦科学アカデミー哲学研究所編 川上洸・大谷孝雄訳『マルクス＝レーニン主義哲学の基礎』295頁
- (26) 林直道著『史的唯物論と経済学』下巻19～20頁
- (27) ソ連邦科学アカデミー哲学研究所編 川上洸・大谷孝雄訳『マルクス＝レーニン主義哲学の基礎』284頁
- (28) 田中吉六『主体的唯物論への途』164頁
- (29) マルクス、エンゲルス著『聖家族』大月版マル・エン全集第2巻 95頁
- (30) 宇野弘蔵著『経済政策論』改訂版宇野弘蔵著作集第7巻 11頁
- (31) 宇野弘蔵著『経済原論』岩波全書 5頁
- (32) 東京大学『経済学論集』第35巻第4号 19頁 横山正彦「経済理論と経済政策との関連」